戦前・戦後の国後島および釧路市における生活史の一断面：元釧路望洋郵便局長 土田一雄氏への聞き取り調査記録（第 2 報）

土田　和世※1・持田　誠※2

Life history of Kunashiri island and Kushiro city in Prewar and Postwar Periods: Interview survey with former Postmaster Kazuo Tsuchida　(2nd report)

Kazuyo TSUCHIDA※1and Makoto MOCHIDA※2

はじめに

土田一雄氏は、1922（大正11）年2月24日、北海道国後郡留夜別村字乳呑路（国後島）生まれの元郵便局員である。本報作成中の2022（令和4）年9月20日に、釧路市において逝去された。

戦時中に標茶郵便局へ移り、やがて兵役で台湾へ赴くが、軍務中に怪我をされて帰国。ほどなく終戦となり、故郷の国後島へ戻ろうとするがかなわず、標茶郵便局への復職を経て、釧路市春採に望洋郵便局を開設された。

本報は、土田一雄氏の人物史を通じて、戦前戦後の国後島や釧路市の様子を読み解き、記録として伝えていこうとするものの第2報である。第1報（土田・持田 2022）では、特に郵便局員である点に着目し、国後島での郵便局の様子、終戦時の状況、釧路望洋郵便局の開設にあたっての苦労などを中心に聞き取りの内容を報告した。

第2報では、土田氏の家族アルバムの中から、第1報の内容に関連する写真を選定し公開する。また、土田氏は短く回想録を書き残しており、ここから関連する内容について抜き出し、補足とした（回想1、回想2）（註1）。

■国後島での暮らしと家族

土田一雄氏は、1922（大正11）年2月24日、父の才一郎氏、母のチヨノ氏（註2）の長男として、国後島の乳呑路で生まれた。土田家の8人家族が、国後島の家で撮影した写真が図1である（註3）。裏書きに撮影年月日はないが、各人の年齢が記されており、「一雄　20」と記されていることから、1942-43（昭和17-18）年の撮影と考えられる。

図1の右上に、厨子に入った仏像が写っている。この仏像が現在も土田家に残っており（図2）、国後島で生活していた時代から引き継がれている数少ない生活資料となっている。仏像には「大正四年十一月十日　御即位式記念奉納」「発願人　高田道見／佛師　渡邊通夫」と記されており、明治期の曹洞宗僧侶、高田道見（1858-1922）による教化のための仏具のひとつと思われる。

図1　国後島留夜別村字乳呑路に暮らしていた頃の土田家一家の写真。後列左端より一雄、喜代二、光子、一三、前列左端より才一郎（父）、芳子、ノブ子、チヨノ（母）。白丸の仏像は島を出るときに家族が持ち出し、現在も土田家に残っている（図2）。

図2　土田家に残る国後島在島時から用いられている仏像。

土田氏の回想によると、子どもの頃の思い出として独自の風習があったことが記録されている（回想2）。

「幼年期の思い出ではもう一つ変わった風習があったことを思い出す。女児が3才か4才となり、頭髪が伸び揃うと頭頂部の“つむじ”を中心として直径5-6センチを剃

※1　帯広市役所　Obihiro City Hall
※2　浦幌町立博物館　The Historical Museum of Urahoro

り落としたものである。私の姉と妹は親父が剃り役、母が剃り跡が隠れるように髪を頭頂で束ね整えてくれていたのが印象的だった。国後島の住民は、東北六県や新潟・富山・石川の各県からの移住者によって開拓された土地柄から、それぞれの出身地の風習が継承されていたものと思うが、昭和4年生まれの末妹が行ったかどうかは記憶にないので、昭和初期には廃れてしまったものと思う。」

写真1ではその風習はわからないが、少なくとも父の才一郎氏は富山県の出身であり、本州の風習が伝わっている可能性がある。詳細は今後の研究課題としたい。

父、才一郎氏は、富山で「屋根屋（屋根葺き）」や「おけ屋」を生業としていた。富山から根室へは「屋根屋」として渡り、根室から国後島の乳呑路へ渡っても「屋根屋」を本業としていた（第1報）。しかし、本業は「暇が多いので昆布採集を主業に、手職〔屋根屋〕は副業としていた」（手記2）という。戦後は千島連盟釧路支部で活動し（図3）、その系譜は、孫である本稿執筆者の土田和世まで続いている。

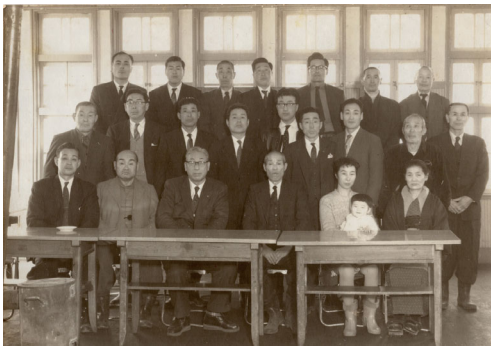

図3　昭和30年頃の千島連盟釧路支部新年総会。最後列右端が土田一雄氏の父、才一郎氏。

■乳呑路小学校と乳呑路郵便局の時代

土田一雄氏は乳呑路小学校（乳呑路尋常高等小学校）へ入学している。図4は乳呑路小学校の校門横で撮影された、在学時の土田一雄氏である。風呂敷包みを抱えた学童服姿で写っている。また、図8は「乳呑路小学校同級の加藤健二郎君と土田一雄」と記された写真で、「1942年9月15日撮影」と記されており、図1と同じ頃のものだろう。

図5　乳呑路小学校の学芸会風景。

図6　乳呑路郵便局長だった中村三郎氏とその家族。最前列左の男性が中村三郎氏で、手に「記念…」と読める表札のようなものを持っている。

貴重な資料として、当時の乳呑路小学校の学芸会の様子を撮影した写真が残されている（図5）。月代（さかやき）の鬘を被り脇差しを指す着物姿が舞台上に並んでおり、時代劇を演じている生徒達と、それを見守る生徒や父兄であることがうかがえる。

図6は、一雄氏がのちに勤務することになる乳呑路郵便局長の中村三郎氏とその家族を撮影した写真である。第1報のなかで一雄氏は、尋常高等小学校を出たあと、16歳のときに郵便局員となったと話している。

図4　国後島にあった乳呑路小学校（尋常高等小学校）の校門横での土田一雄氏。

土田一雄「おやじが局長を知っていたので、それで頼んだんです」
土田和世「それは中村さんかい？写真があるんですよね。郵便局長、中村三郎さん」
土田一雄「中村三郎さんという局長だ」

ここでいう「写真」が図6である。

最前列左の男性が中村三郎氏で、手に「記念…」と読める表札のようなものを持っている。

第1報に掲載した土田一雄氏による「国後郡留夜別村乳呑路の市街地図」によると、乳呑路郵便局に隣接して中村三郎宅がある。写真はこの中村三郎宅前で撮影した可能性もあるが、地図を見ると、郵便局の裏手に「中村記念館」という建物が記されている。中村家は、郵便局に隣接して駅逓所も経営する地域の名家であり、おそらくその資料を収蔵した記念館と思われる。図6の写真で中村三郎氏が手にしている表札状のものは、この「中村記念館」の表札である可能性が考えられ、したがって撮影場所も記念館前と思われる。なお、後に山の裾野が写っているが、写真の角度からみて、爺爺岳の裾野であると推察できる。

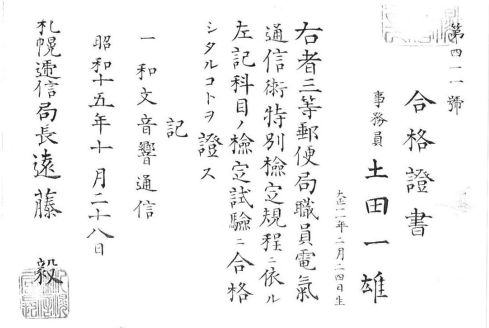
第四二一號
合格證書
事務員 土田一雄
大正二年二月二四日生
右者三等郵便局職員電氣通信術特別檢定規程ニ依ル左記科目ノ檢定試驗ニ合格シタルコトヲ證ス
記
一 和文音響通信
昭和十五年十月二十八日
札幌遞信局長遠藤毅

図7　三等郵便局職員電気通信技術特別検定試験合格証書。

図8　乳呑路小学校同級の加藤健二郎君と土田一雄氏（右）1942（昭和17）年9月15日撮影。

一雄氏はさらに、回想録のなかで郵便局員となった経緯に詳しく触れている（手記2）。

「私が郵便局に就職したのは昭和13年5月である。昭和11年3月、乳呑路尋常高等小学校の高等科を卒業し家業の昆布採りを手伝っていたが、矮小な体格であったのを親父が心配し、労働者には向かないから月給取りになれと言い、郵便局長にお願いして欠員を待っていた。たまたま電報配達員に欠員ができ、臨時集配手として採用されたのが昭和13年5月1日で、年齢16歳、日給70銭だった。翌14年5月内務員に欠員ができて臨時事務員となり日給92銭。そしてその翌年の15年6月事務員となって日給1円3銭…」

ここでも、父才一郎氏は「おけ屋」や「屋根屋」といった技術を持つ職人だったが、乳呑路では、本業よりも昆布採集業を主としていたことがわかる。

その後、1940年10月には、郵便局の「和文音響通信」の検定試験に合格しており、証書が残されている（図7）。回想録には次のように記述されている（手記1）。

「電気通信技術の資格を持つ優秀な職員は郵便局職員の花形で日給が10銭高かったのである。電報の送・受信は島の郵便局の主要な業務であったから、これが出来ない職員は使い物にならない。電気通信技術は職員の必須科目と言われ採用直後から先輩職員の指導を受けた。トンツー、トンツーのモールス符号の音響通信は、運動神経が鈍く聴力も感度の弱い私には大変な試練であったが10銭昇給の魅力に力づけられ頑張れた。採用されて2年6ヶ月後の昭和15年10月28日付けの合格証書を手にし同日にさかのぼって日給が1円14銭から1円24銭に昇給したときの嬉しさ喜びの大きかったこと…」

当時の乳呑路で電報が盛んに交わされていたことは、第1報の中でも触れられており、「乳呑路は古釜布と泊よりは少なかったけど、それでも1日発着したものだから60通ぐらいだったね」と語っている。

■開運町時代の標茶郵便局勤務の時代

土田氏は、1943（昭和18）年4月、21歳のときに、希望を出して北海道本島の標茶郵便局へ転勤する。標茶郵便局は、1891（明治24）年に釧路川沿いの開運町に設置された。当時の標茶町は、釧路川を用いた舟運が盛んで、開運橋付近に船着き場があったという。しかし、1927（昭和2）年に国鉄釧網線が釧路から標茶まで開通すると、物流の主体は舟運から鉄道へ移り、市街地も開運橋対岸の標茶駅周辺が発達していく。のちに標茶郵便局も現在地の旭地区へ移転した。

第1報でも、土田氏が戦前に勤務していた標茶郵便局は「川を越えて……して左側へ曲がって、左側へ回る

図9　標茶町字開運町の旧局舎裏の釧路川河畔

図10　標茶局裏の河畔。図9と同じ場所か。

道路というのは釧路から通っている道路ですけどね」と述べており、当時はまだ開運町に局があった事を示している。

また、図9には「標茶町字開運町の旧局舎裏の釧路川河畔」、図10には「標茶局裏の河畔」と記されており、いずれも同じ地点と思われる。やはり勤務先の標茶郵便局が、開運町にあった事を示している。図9の後方に写っている橋が開運橋だろう。

■兵役中の写真

1943（昭和18）年8月、標茶郵便局へ勤務してわずか4ヶ月後に召集令状を受け、兵役に就く。

最初は神奈川県の横須賀海兵団へ入団し、同年9月に美幌海軍航空基地で新兵教育を受けた。1944（昭和19）年3月に再び横須賀へ戻り、横須賀海軍通信隊へ勤務した。

同年9月から横須賀海軍通信学校有線訓練生となり、12月の訓練終了とともに、第11航空艦隊有線班に派遣され、高雄海兵団へ仮入団して台湾へ渡った（土田2013）。

図11は「美幌海軍航空基地の新兵時代」と書かれているので、1943（昭和18）年9月から1944（昭和19）年3月までの間に撮影されたものと推察される。また、図12は1944（昭和19）年7月23日、横須賀海軍通信隊の一等水兵だった時代に撮影したもの。右腕に、横一線と桜に錨の一等水兵肩章がみえる。

図11　美幌海軍航空基地の新兵時代

図12　1944（昭和19）年7月23日横須賀海軍通信隊当時、一等水兵肩章がみえる

図13　1944（昭和19）年10月29日於東京逓信官吏練習所での集合写真

図13は、1944（昭和19）年10月29日に東京逓信官吏練習所で撮影された集合写真である。東京逓信官吏練習所は、1909（明治42）年から1949（昭和24）まで、現在の東京都港区芝公園内に存在した、逓信省の教育機関である。土田一雄氏は逓信省管轄の郵便局職員だが、当時は神奈川県横須賀市久里浜にあった横須賀海軍通信学校の訓練生であり、写真も水兵服であることから、海軍の訓練の一環として同校を訪れた際の集合写真だろう。

■戦後の標茶郵便局勤務の時代

終戦後、すでにソビエト連邦の占領によって国後島への帰島を断念せざるを得なかった土田氏は、1945（昭和20）年10月から標茶郵便局で職場復帰を果たす。戦中戦後を通して22年間勤務することとなった標茶郵便局時代について、土田氏は次のように回想している。

「当時の標茶局は釧路管内特定局の中では鳥取局に次ぐ大局で、定員36名で、年齢構成が十代後半の16・7歳から二十代後半の純真・純情な若者が80パーセントを占め、みんな真面目で生き生きと活気があった・・・〔中略〕・・・昭和29年10月、当時の局長が脳梗塞で倒れ昭和33年退職するまでの間、局舎を国営新築する大きな事業があったり、当時活動盛んだった全逓釧特支部との対応など、補佐の苦労は数多く、辛いことは多かったが、職員の力強い協力があって楽しいことの方が多かった」（手記1）

図14は、標茶局時代の1958（昭和33）年6月15日の国鉄釧網線車内で撮影されたもの。写真裏面には「川湯望岳荘の放送委託事務打合会出席の帰途車中に

て。雄別局溝口氏写す」とある。ラジオ受信が国の許可制だった1950（昭和25）年の放送法制定以前の時代から、郵便局は聴取料集金の委託を日本放送協会（NHK）から受けていたが、制度が大幅に改正されたことから、新放送制度に関する講習会が開かれていたものと思われる。

図14　1958（昭和33）年6月15日撮影。国鉄釧網線車内。写真裏面には「川湯望岳荘の放送委託事務打合会出席の帰途車中にて。雄別局溝口氏写す」とある。

■釧路望洋郵便局開設のころから

1965（昭和40）年8月1日付で、土田氏は釧路望洋郵便局長となり、特定郵便局を新たに開設するという大仕事に入る。第1報でも、この時期に非常に苦労されていたことが述べられているが、回想録にもそれが記されている（手記1）。

「釧路望洋郵便局新設開局により特定郵便局長に任ぜられ同局局長になった時の苦労は、私の人生における最大の苦労だった。局舎の自費建設で借金。給料は俸給表を横滑りで標茶局局長代理のときと同額。管理職手当は標茶局局長代理は3パーセント、無集配局釧路望洋局長は1パーセント。局長になって給料が上がり収入が増えるものと思ったのが逆に減収となりその上局舎自費建設による借金の返済が重なった」

図15–17は、新設した釧路望洋郵便局の裏に新築する、土田氏の住宅の建設工事の様子である。図15の右側に背面が写る建物が郵便局の局舎だが、これは初代の局舎である。

第1報のなかで、1975（昭和50）年ころに、局舎をいちど建て替えたというやりとりがある。

土田和世「確か屋根が違うんですよ、最初の」
持田　誠「同じ場所に」
土田和世「同じ場所。このときのと、これが郵便局の裏で今がこれで〔図15と図18の写真を観ながら〕」
持田　誠「四角いね」
土田和世「ちょっと違うかなと。おばさんに昨日聞いたら、1回建て替えたんだよと言っていで…」

図15

図16

図17

図15-17　釧路望洋郵便局裏に新築する住宅の工事模様。図15の右側に背面が写る建物が郵便局の局舎。写真左側奥には、富士見坂–桜ヶ岡通りに立ち並ぶ商店が見える。図16には、当時の団地（道営住宅）が見える。図17は完成間近の住宅。

土田氏によると、1965（昭和40）年に建てた局舎では狭く、10年ほどで建て替えたのだという。図18–19は、その時建て替えた新しい局舎を1980（昭和55）年10月に撮影したものである。

この局舎周辺を2015年2月に撮影したものが図20-21である。この頃、すでに局舎裏に土田氏宅は無く、図19に写っている隣接の商店も無く、局舎だけがポツンと建っているのがわかる。

1965（昭和40）年の開局当初、すでに周辺には団地（道営住宅）ができており、その後も太平洋炭鉱の関

図18

図19

図18-19　釧路望洋郵便局の局舎全景。1980（昭和55）年10月30日撮影。

図20

図21

図20-21　2015（平成27）年の釧路望洋郵便局と周辺の様子。すでに土田一雄氏の自宅も無く、図19に写っている隣接の商店も無く、局舎だけがポツンと建っている。（2015年2月17日、持田誠撮影・所蔵）

係などで住宅が増えていった。郵便局の利用者にも団地の人が多かったと、第1報のなかでも述べている。

それを裏付けるように、図16の自宅建設風景の写真には、すでに当時の団地が見える。また、図22は、1975（昭和50）年1月の大雪の日に、自宅の窓から外を見た写真で、やはり団地が写っている。

図22　図17の住宅窓から撮影した光景。1975（昭和45）年1月撮影で、裏書きには「大変大雪」とある。

第1報では、釧路へ来たばかりのころの望洋の様子として、買い物を太平洋炭鉱の購買でしていたという話が出てくる。

「買い物は太平洋炭鉱の購買と言っていたかな、そこが今で言えば、あの辺だな、交番があります。ここから移っていった新しい。あの辺だったかな、確か。炭鉱の労働組合がつくった購買所がありましたね。そこで買い物するんですよ」

図23

図24

図23-24　太平洋生活協同組合。

図23-24には「せいきょうマーケット」と大書きされている下に、太平洋生活協同組合本部と記されている店舗が移っている。

太平洋生活協同組合は、1954（昭和29）年に設立された太平洋炭礦生活協同組合が母体である。1964（昭和39）年に太平洋生活協同組合となり、1971（昭和46）年に釧路生活協同組合、1978（昭和53）年に釧路市民生活協同組合となった（註4）。したがって、土田氏が釧路望洋郵便局を開設した当時は、まだ太平洋炭礦の職域生協であった。地域の人たちは「購買」と呼んでいたらしいことがわかる。

■厚岸の牡蠣島

釧路望洋郵便局で働いていた仲間や、近隣の郵便局の職員とは、OB会などの繋がりもあり、盛んに交流が続いていた。

図25～28は、釧路望洋郵便局の慰安会で、厚岸町の牡蠣島へ行ったときの様子が写っている。牡蠣島は厚岸湖に位置するカキ礁で、かつては広い面積を持つ島で国の天然記念物「厚岸湖牡蠣島植物群落」にも指定されていたが、著しい地盤沈下により大半が水没し、平成6年（1994）には天然記念物指定も解除されている。

牡蠣島の牡蠣礁下にはアサリの層があることが知られている。図25～28は、牡蠣島でアサリの潮干狩りを楽しんでいる様子と思われる。写真に撮影年月日の記載はないが、釧路望洋郵便局開設後なので昭和40年代の撮影と推察される。この年代でも牡蠣島の面積はかなり小さくなってきているものの、一帯でまだアサリの潮干狩りが楽しまれていたことがわかる。

■興津海岸の大滝と眼鏡岩

図29～32は、1970（昭和45）年6月に撮影された、釧路市の興津海岸を家族で散策する様子の写真である。春採大滝の向こうに、穴のあいた岩が見える。写真の説明に「眼鏡岩」と記されているが、大滝との位置関係や形状から、現在知られている桂恋浜の「眼鏡岩」ではないと思われ、近年崩落した興津海岸の「眼鏡岩」であると推察される。

図25

図26

図27

図28

図25-28　釧路望洋郵便局の慰安会で厚岸町牡蠣島へ行ったときの様子。

図29

図30

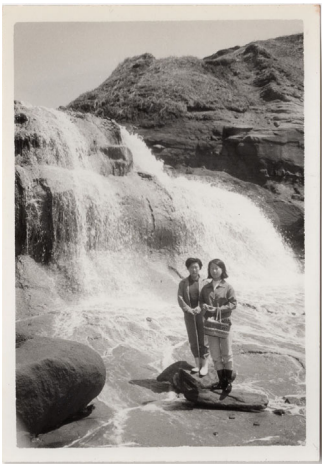

図31

図32

図29-32　1970（昭和45）年6月の興津海岸。眼鏡岩や大滝が写る。

おわりに

土田氏は第1報の最後に、こう述べている。

「思い出すね。島のことはもう毎日思い出すね」

「島の爺爺山とか、それから乳呑路の風景とか、もうはっきり浮かんできます」

それを裏付ける絵が残されている。図33は、土田氏が国後島の自宅の窓から見た景色を描いたもの。

「ソビエトに島を追われるまでの21年間、朝夕眺めて暮らした懐かしい光景です」と、NHKアーカイブス「戦争証言」にコメントと共に提供しているものである。

第1報の聞き取りの最後でも、「貧乏していたけど、やっぱり島のあれ〔暮らし〕が〔良かった〕」と述べ、再び国後島の地を踏むことを望んでいた土田一雄氏は、2022（令和4）年9月20日、ついにその思いが叶わないまま、享年100歳で逝去された。

註1　手記1：「九十年を回顧する」、手記2：「続・人生九十年を回顧する」どちらも２０１３年に郵便局OB会の会報へ投稿するために書いたものと思われる。

註2　土田一雄氏の母、チヨノ氏の戸籍上の表記は片仮名表記の「チヨノ」だが、図1の写真裏書きには「千代乃」と漢字表記がある。実生活でどちらの表記が重んじられていたのかわからないため、ここでは戸籍上の表記であるカタカナで表記した。

註3　第1報のなかで土田氏は、〔兄弟は〕「赤ん坊で死んだのを入れると7人」と答えている。のちの調査で、亡くなった長女は「キミ」であることがわかっている。

註4　2003（平成15）年に釧路市民生活協同組合は、生活協同組合コープさっぽろと事業統合して消滅。店舗はコープさっぽろが事業継承し、整理統合がはかられた。

引用文献

土田和世・持田誠, 2022. 戦前・戦後の国後島および釧路市における生活史の一断面：元郵便局長 土田一雄氏への聞き取り調査記録. 釧路市立博物館紀要, 40: 15-24.

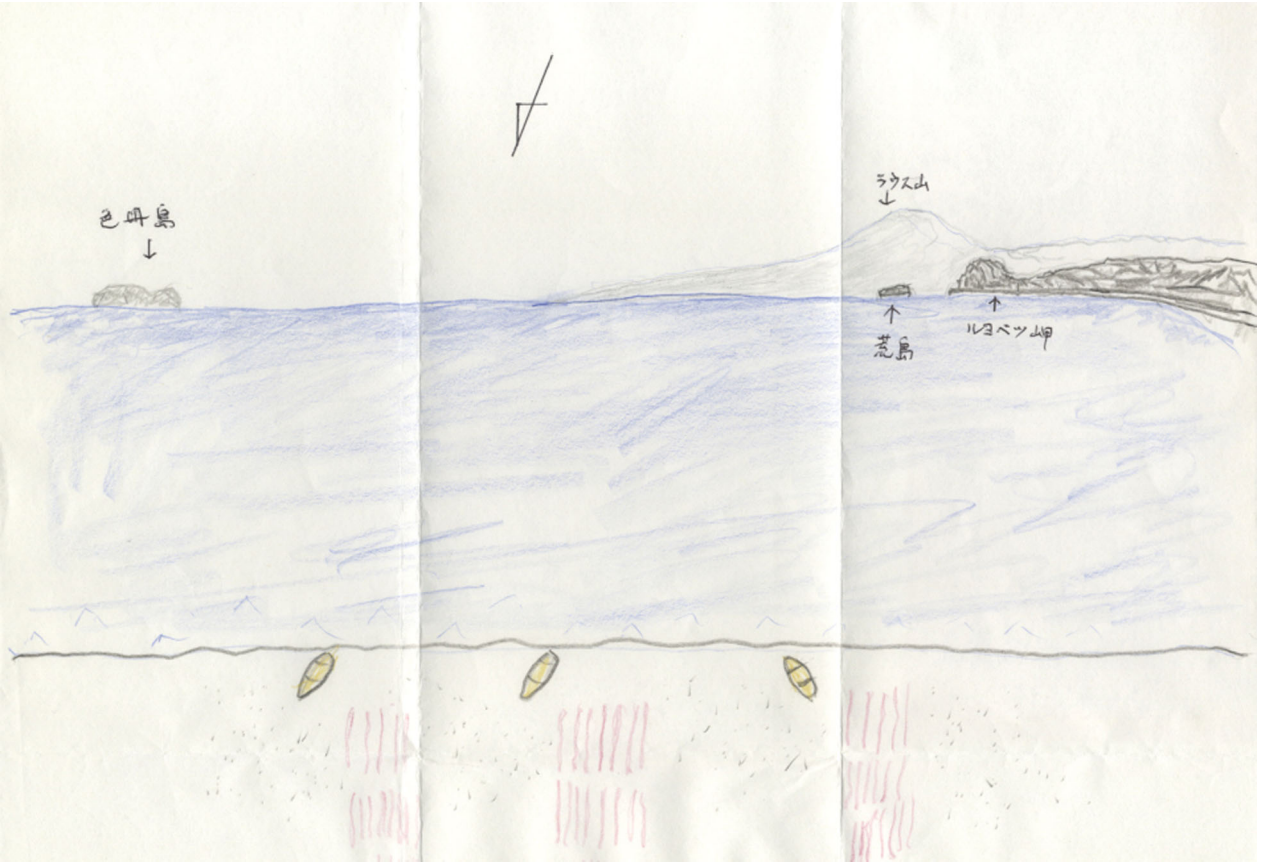

図33　土田一雄氏が国後島の自宅の窓から見た景色。「ソビエトに島を追われるまでの21年間、朝夕眺めて暮らした懐かしい光景です。」（NHKアーカイブス戦争証言でのコメント）